OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	からだトーク／生まれる
Author(s)	本間, 直樹; 佐久間, 新; 西村, ユミ 他
Citation	Communication-Design. 2013, 8, p. 65-88
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24609
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

からだトーク／生まれる

本間直樹（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター：CSCD）
佐久間新（ジャワ舞踊家）
西村ユミ（首都大学東京健康福祉学部）
玉地雅浩（藍野大学）

It was born, “Karada Talk (Body Talk)”

Naoki Homma（Center for the Study of Communication-Design, Osaka University）
Shin Sakuma（Javanese Dance）
Yumi Nishimura（Faculty of Health Sciences, Tokyo Metropolitan University）
Masahiro Tamachi（Aino University）

2009年より始められた〈からだトーク〉は、私たちが日々〈からだ〉の運動と感覚によって接しているモノ、空気、光、触覚といった知覚世界の探索に私たちを誘い出し、身体を通して世界と対話する仕方を、参加者ともに探り出していく参加型プログラムである。誰もがする日常の何気ない動作に着目し、その動作そのものにゆっくりと沈潜していきながら、私たちの身体と世界とが対話していることばに耳を澄ますこの試みにおいては、初心者と熟練者の垣根は存在しない。〈からだトーク〉は、〈からだのことば〉に耳を澄ませる学びの場であり、同時に、新しいダンスが生まれる現場でもある。本稿では、企画背景、内容解説、記録、その後の展開について、主催メンバーが自由な形式で綴る。

キーワード
からだ（身体）、ダンス、対話
body, dance, dialogue

はじめに

〈からだトーク〉は、私たちが日々繰り返す何気ない動作や、ごく身近にある水や煙などの現象に目を向け、物や自然と身体とが対話するなかでダンスが生まれる様子を体験する参加型プログラムである。本稿では、その企画背景、内容解説、記録、その後の展開について、主催メンバーが自由な形式で綴り、〈からだトーク〉の一回一回のプログラムにおいて、生まれては消え、消えては生まれを繰り返すことがらを、あらためて言語で記述することを試みる。（なお、開催された〈からだトーク〉の映像記録は、YouTubeのサービスを通して下記の場所にすべて公開されている。www.youtube.com/cafeimage）

1. からだのことば／本間直樹

1.1 〈からだのことば〉で

〈からだトーク〉というシリーズのタイトルは、ふとした思いつきから生まれた。

始まりは、コミュニケーションデザイン・センター（CSCD）主催の参加型プログラム（オレンジカフェ、ラボカフェ）の一つとして、〈からだ〉をテーマにした何かをやってみたい、というアイデアだった。CSCD発のプログラムは、参加型・対話型をめざしている。対話することそのものは重視したいが、しかし、ことばではなく、〈からだ〉を中心としたプログラムにしたい。また単発のイベントではなく、何年もかけてじっくりと醸成させたい。これらの意図から、レギュラーの協力者として、こどもから、障害のある人、高齢者まで、さまざまなひとたちと踊るジャワ舞踊家の佐久間新さんと、理学療法士として臨床哲学を追究する玉地雅浩さんの二人が選ばれた。準備段階としてCSCDの教員数名とともに、2007年の夏から翌年にかけて、「身体と表現」をめぐる話し合いと実験がセミクローズドで何度か試みられる。その会合のなかで、具体的に何をするかについての内容はともかく、近年しばしば用いられる「身体表現」ということばが、どうもしっくりこない、という点で意見が一致する。身体で何かを表現する、あるいは身体が何かを表現する、どっちにしても、この「何かを表現する」というところに引っかかりを感じる。また、身体表現といっても、いったいどこからどこまでが表現なのか、もはっきりしない。表現をする身体と、しない身体が別々であるかのように。曖昧であることすべてが悪いことではないが、身体表現ということばにつきまとう曖昧さは、むしろ、身体にとっても、表現活動にとっても、どちらにもマイナスに働くように思われる。「身体表現ワークショップ」はさらに漠然としていて、より訳がわからない、違うタイトルを考えましょう。そのような話し合いがなされた。

〈からだ〉を中心に据えつつ、対話する、ということを直にやってみたい、〈からだ〉について話すのではなく、〈からだ〉に問いかけ、〈からだ〉が話す、という具合に。問いかけ、応えることは、確かに、対話の本質といえるだろう、〈からだ〉が物に問いかけたり、物から問いかけられたり、その両方が応えたりする、その対話の様子をていねいにひろいあげたい、そして、気が向いたら、そういうからだとのやりとりを、声のことばで続けてもいい、ことばを排除するのではなく、〈からだ〉と〈ことば〉がゆるやかに連続している時間をつくる、そのあたりを狙って、〈からだトーク〉が生まれた。

2009年春から本格的に始められた〈からだトーク〉のメインガイド役は、佐久間さんである。ジャワ舞踊家である彼は、インドネシア・中部ジャワで舞踊を学び、日本とインドネシアの双方を舞台に、内外のさまざまなダンサーやアーティストたちとの共演を行ってい

る。筆者の知る限り、ジャワ舞踊は、一定の様式のもとに完成されており、変更が加えられることなく踊り継がれている舞踊もある一方で、そこからの跳躍や逸脱が舞踊家たちによって常に試みられてもいる。つまり、全体としての舞踊は過去の作品の継承よりもむしろ、絶え間ない創造によって、常に新たに生み出され続けている。佐久間さんも伝統舞踊を過去の模範としてなぞるのではなく、その細部、喩えるならば、舞踊の遺伝子情報まで解体し、舞踊の生成プロセスを自らの身体で感じとることによって、舞踊そのものからその原型となる思考を解読することを試みている。振り付けや姿勢に至る前の、原型となる身体の感覚、それはおそらくジャワ舞踊を生み出した、生ける舞踊の精髄であり、あらゆる舞踊の具体的な形態はそこから派生した二次的表現でしかない。舞踊を習得する者のなかでも、その二次的表現だけを表面的になぞる者が少なくないなか、佐久間さんは不断の探究によって、芸術表現が生まれいずる瞬間に留まろうとする。

彼は公演活動やジャワ舞踊の指導にあたる傍ら、さまざまな人々とともに表現することの探究を続けている。彼は、私たちが日々、〈からだ〉の運動と感覚によって接しているモノ、空気、光、触覚といった知覚世界の探索に私たちを誘い出し、身体を通して世界と対話する仕方を、参加者とともに探り出していく。彼は、ドアノブを回す、紙を引き裂く、といった誰もがする日常の何気ない動作に着目し、その動作そのものにゆっくりと沈潜していきながら、私たちの身体と世界とが対話していることばに耳を澄まし、そのことばが私たちにも聴こえるように導いてくれる。この試みにおいては、もはや初心者と熟練者の垣根は存在しない。〈からだトーク〉は、〈からだのことば〉に耳を澄ませる学びの場であり、同時に、新しいダンスが生まれる現場でもある。

佐久間さんは、〈からだのことば〉を巧みに操る一方で、同じ〈からだ〉から繰り出される声と文字のことば、つまり、言語による探究も重視している。異なる感性やさまざまな違和、疑問をたがいに表明しながら、時間を惜しまずじっくりと対話を進める。彼のなかでは、言語による対話も〈からだ〉による対話も、異なる二つの能力なのではなく、一つの対話する知恵から生み出される二様の表現であるようだ。それはどちらも、表面的な観念の交換でも、物理的な力の均衡でもなく、身体感覚を通して出会われる他者との交信であり、刻一刻と出会われる他者の経験のなかで、自らを組み替え、表現へと編み直していく、自己変容の知恵といえる。それゆえ、〈からだのことば〉と〈言語のことば〉は、一方から他方へと翻訳可能であり、この二つのコミュニケーションに参画する者たちは、〈からだ〉を生きる者として連帯し、それぞれ異なる存在の仕方についてさまざまに語り合うことができるのだ。

1.2 問いかけ、応答し

炊飯器から吹き出される湯気と戯れる、コップや鍋、プールや水溜まりの水と一体になってみる、線香の煙を愛でる、わずかな風の流れにそっと身を沿わせる、音に導かれて動いてみる、月の光を肌に感じる、炎の周りに集まる。こうして、〈からだトーク〉は、湯気に始まり、水、煙、風、音、月の光、炎まで、私たちの身の回りにあるさまざまなものを通して、〈からだのことば〉に耳を澄ます。言語のことばが、単純に語彙と文法と発話からなるのではないのと同じく、〈からだのことば〉は〈からだ〉とモノのあいだの単純なやりとりからなるのではない。煙は、凝集と拡散、流れと速度、かたちとひろがりのすべてによって私たちの〈からだ〉に問いかける。それは、単なる視覚的な刺激ではなく、問いかけなのだ。私たちの〈からだ〉は知らず知らずのうちに応え始めている。問いかけは、問いかけられる相手の応答を予感し、応答する側も同時に自分自身に何を応えるのかについて問いかけている。問いかけと応答は刺激と反応という二つの出来事のあいだの因果関係ではなく、最初から最後まで、たった一つの出来事である。煙がゆったりと漂う。それは「漂う」という感覚が私たちの〈からだ〉のなかに生まれるのとまさしく同時なのだ。そして、そのように生まれる自分のなかの感覚にうまく調子を合わせることで、私たちのからだは自然に動き出すことができるようになる。

〈からだ〉は問いかけであるとともに、応答の始まりでもある。それは言語のことばとまったく同じである。水で満たされたコップを手にもつと、すぐさま全身がそれに応え始める。〈からだ〉が水に問いかけているのか、水が〈からだ〉に問いかけているのか、どちらなのか分からない。〈からだ〉の震えが水に伝わるというよりは、コップのなかの水は、〈からだ〉の分身であり、分身であるからには、私のように〈こころ〉をもつ。私の〈こころ〉は分身としての水によって、そこに表現されているのである。この〈からだ〉と水のあいだの、問いかけと応答は、しかし、一つの何かに決して収斂することはない。それはやはり、問いかけと応答という二様の表現を通して、どこまでも分岐していく。言語のことばが、二人の〈からだ〉のあいだを無数の表現によって、どこまでも近づけるとともに、どこまでもその違いを増やしていくように。

音と〈からだ〉は同時に存在する。〈からだ〉が音に反応するのではなく、音は〈からだ〉の応答そのものなのだ。喉の振動と息と意味とを組み合わせることが話すことではないのと同様に、音にあわせて身体を運動させることがダンスではない。〈からだ〉は音をたてる。〈からだ〉は一つの音源であり、リズムの生成である。〈からだ〉の中の音と、外の音が同時に響く。そのときに私たちの〈からだ〉はダンスしている。ダンスは音に伴われた身体表現ではないのだ。むしろ、一つの表現に音と〈からだ〉の両方が参加する。音と〈からだ〉がぴったり一致しているとき、私たちは無限の喜びを感じる。人は音楽を演じるとき、すでにダンスを開始しているし、ほとんど無音のダンスする〈からだ〉も豊かな音響に満ちているのだ。

〈からだ〉の問いかけと応答は、テレパシーである。つまり、それは距離と感覚を同時に生み出す。月の光は遠隔触覚であり、炎は人を集め、集団を組織する。テレパシーが、言語を介さない情報通信である必要はない。テレパシーは〈からだ〉においてすでに機能し、私たちが集団であるときに必ず利用している最古の資源なのだ。私たちの〈からだ〉がそこに存在するところの世界は、このような資源に満ち溢れている。〈からだトーク〉は〈からだ〉のテレパシーに目覚め、そうした資源にアクセスする仕方を思い出す。共通の資源にアクセスできるからこそ、私たちはことなる〈からだ〉のあいだで、同じものが表現されるのを感じることができる。私たちは言語を用いて意思疎通を図っているように信じ込んではいるが、その言語を使用している最中であっても、じつは、息や声、そのリズムと調子によって、もっと深いところで〈からだのことば〉に乗り、その上を滑りながら、〈からだ〉たちのあいだを行き来している。

1.3 ダンスが生まれる

〈からだトーク〉の時間のなかで、いくつものダンスが生まれる。

ダンスといっても、振り付けやスタイルのあるものばかりがダンスではない。いわゆる見せ物としてのダンスではなく、ダンスをダンス足らしめているもの、それは、M. メルロ＝ポンティが好んで使ったように、永続する妊娠と出産であり、〈からだのことば〉を話すことだ。私たちは誰でも、〈からだのことば〉を使い始めるや否や、ダンスに加わる。それは目に見えないものであるかもしれない。ペットボトルに入れた水とともに揺れながら耳を澄ます。視覚的外見に関心が囚われていれば、ダンスは生まれないし、それを感じることもできないだろう。ダンスは内側で生まれる。しかし、それは内側に閉じ込められているわけではない。妊娠するように、〈からだ〉のなかの外に胚胎する。胎児がまだ見えないのと同じく、それはまだ見えるものではないが、確かに感じられるものなのだ。注意しよう、ペットボトルのなかの水の動きがダンスを表現しているわけではない。確かに、水と〈からだ〉の共振は、身体の大胆な動きよりもはるかに繊細に、胚胎されたものを表現しているが、それは見えるものとして存在するのではなく、水、ペットボトル、〈からだ〉が一つに連なった空間という胎内に、しずかにリズムとして息づいているのである。

〈からだトーク〉の時間のなかで、ダンスは見える対象、見られる対象から解放される。まさに、参加者がわが身にじかに感じているもののただなかに、ダンスは生まれ始める。見られる対象として萎縮してしまうのではなく、自分の〈からだ〉が胚胎した見えない微小の炎の揺れを感じるのだ。それだけではない。見えない内側と見える外側、その二つの面を裏表に縫い合わせているのが〈からだ〉の神秘である。〈からだ〉は見えない内側を覆う外皮ではない。それは二つの面の接合と連絡そのものである。それゆえ、〈からだ〉にとって隠されるものは何もないのだ。内面も何もかもすべてが、そこに曝け出されている。逆説的にも、ダンスは、身体が見える対象、見られる対象から解放される瞬間に、見えないものが見えるものになり、見られ感じられるようになる出来事として、そこに生成し消滅する。見られる対象は、それを見る観念によって捕獲され、消滅することを禁じられてしまうが、生成消滅するダンスの身体はそのような観念の手をすり抜けてしまう。それは、見る者と見られるものへと引き裂かれるよりも、ずっと早く、消え去ってしまう。その儚さゆえに、強く美しい。

水と〈からだ〉のカップリングが、〈からだ〉の内側の見えないものの表現をなすのとまさに対照的に、羽毛を手に空気の流れを感じることは、〈からだ〉の外の出来事が内側に伝染する経験である。羽毛のわずかな揺れは、それを支える手に伝わる動きとしてはあまりに軽微で、ほとんど意識されないといってよい。にもかかわらず、毛先に生じたわずかな動きが感覚の全体を通して〈からだ〉に話しかけ、〈からだ〉が応え、その内と外の両側に予測のできない感情の動きを生み出していく。一見して、見える、動くものが〈からだ〉を動かしているように思えるが、じつはそうではない。動かすものと動かされるものとが分離してしまえば、それはダンスというよりも、巧みに、あるいは、ぎこちなく見える運動の錯覚に過ぎなくなるだろう。ダンスが、視覚的な幻ではなく、生きたものであるためには、〈からだ〉の内と外、見る者と見られる者が一つの全体をなしていなければならない。それは何ら難しいことではない。〈からだ〉の集中によって、毛先をそのままに感じることが、当の〈からだ〉に新しい皮膚と外見を与えるのだ。ダンスが生まれる、とは、〈からだ〉を見られる対象から解放するだけではなく、見えるものの内部に〈からだ〉が新たに生まれ直すプロセスのことをも指すのである。

2. 感じるダンス　生きることは踊ること／佐久間新

この試みが始まった頃、大阪と京都をまたぐ山里の古い家に妻と小学生の息子と暮らし始めて10年が経とうとしていた。ちょうど、それまで見えなかったもの、聞こえなかった音が感じられはじめていた頃でもあった。ここでは、その時々にメールやインターネット上で書いた文章を並べ直して、〈からだトーク〉を違った角度から眺め直してみたい。何気ない会話のようなメールや、ちょうど流行りだした140文字のつぶやきといった日常に近いところから〈からだトーク〉はうまれたのだ。

大阪とはいえ標高700メートル近い山の麓の棚田に囲まれた集落での暮らしは、都会や住宅街での生活に比べれば、自然をずっと身近に感じることができる。それでも、その自然の微妙な変化の楽しみは最初から感じられたことではなかった。マイナス7、8度になる寒い冬を何度か越して、6年7年と月日が経って次第に、夜明け前の空気の特別さや鶯やカラスの個性が見え始めるようになった。そのことは、僕のダンスに確実に影響を与えたし、「からだトーク」のような場がうまれることにもつながった。そして、参加者との毎回の経験は、僕に勇気を与え、感覚をさらに広げてくれた。そして、それをもっとみんなで共有したいと思うようになった。そのしずくがこれらのことばに見え隠れしているように思う。

（以下は異なる媒体からの引用からなっている。斜字体：*twitter（@kasakuman）*より、

教科書体：企画メンバー内のメールより、明朝体：ブログ（http://margasari01.blog63.fc2.com）より、ゴチック体：CDCDウェブサイト（www.cscd.osaka-u.ac.jp）掲載の案内文より。）

舞踊をする中でさまざまな気づきがうまれ始めた時期があった。それはいくつかのことと結びついていた。骨や脱力、ダンサーとの交換、ジャワ舞踊と出会った最初の直感、すとんと落ちるような理屈、手首を回すのに手首を回してはいけないみたいな。そして、その気づきは僕を興奮させ、前のめりにさせた。（04/04/2012）

2009年5月「からだの声に耳をすます（1）」

今回は、月初めということもあって宣伝がぎりぎりで参加者は少人数でした。なので、少人数だから感じられる繊細な感覚をいろいろ探ってみました。地下空間の湿っぽさを嗅いでみたり、地下鉄によって動く空気を感じてみたり、どこまで音が聞こえるかを探ってみたり・・・。（07/05/2009）

ブナが学童なので弁当作り。今朝は鳥の唐揚げ。色とにおいと泡と音を確かめながら菜箸で引き上げると、油が切れていく震動が伝わる。カラッと揚がったしるし。布をハサミで裁つ時に、布の目や引っぱり加減、ハサミの開け具合や歯と歯の合わさり具合などを感じて、あっ行けると思う瞬間がある。（03/04/2012）

2009年6月「日常の気になる動き」

次回のカフェですが、日常の気になる動きでやってはどうかなと考えています。
僕もいくつか用意して行きますが、最初はこのテーマで話をしながら、集まった皆さんにも自分の「日常の気になる動き」を探してもらいたいと思います。（2/06/2009）

霧のベールの中を、ヘッドライトで照らしながら、グイグイと山道を上がって帰宅。乳白色の向こうにブルーの月が流れていました。（31/01/2010）

夕方、雨の中、山の木々の間から靄の柱が何本も立ち上がっていました。天に吸

い上げられていく靄。下りてくるのもあるけど、今日のは立ち上がっていく方。(23/03/2010)

濃い緑と明るい緑の山にどんよりと靄が下りている。いつもより田んぼのカエルが賑やか。いい声のに近づいていくと、パッと声を潜める。歩いてまた別のに近づくと、またもやパッと。僕もパッと止まる。カエルとダンス。(07/05/2010)

2009年12月「湯気」

12月のカフェの内容ですが、前回にも予告したように（確か言ったような気がするんですが・・・)、寒くなってきたし、湯気で何かやってみたいと思っています。
いい湯気を、みんなで作ったり、湯気になって、動いてみたり。
宣伝コピーですが、こんな感じでいかがでしょうか？(28/10/2009)

雨上がり、山が折り返したところに靄が立ちこめている。乳白色の濃い部分と淡い部分が連なり、その先は消えている。
からだの気配を消して、靄のように忍び込んで踊れないだろうか。

寒い朝、炊飯器のふたを開けるとシュルシュルと湯気が次から次へと上っていく。渦を作ったり、揺らいだりしながら。
肩や腕を楽にして、湯気のように宙を舞って踊れないだろうか。

実験の最後には、炊きたてのご飯をみんなでイタダキマス。

雨の通学。傘、長靴、レインコート、ビニールの感触。見送るが、ブナは振り向かない。角を曲がっていく。35年前の僕を、見送っていた人のことをすこし思う。(22/04/2010)

小雨。イモリがあちらこちら。田んぼの中、雨樋の上、水たまり。ちあきちゃんが2センチくらいの小さいのを見つける。田んぼの波紋、わたぼうし、ネギ坊主のまんまる。手で植えられた苗と水の中の足跡の軌跡は、バティックのように揺らいでいる。(11/05/2010)

2010年5月「水」

この日の映像は、鍋の中の水、グラスの水、プールの水、水たまりの波紋、といった感じで、人よりも水に焦点が当っています。

しかし、これもダンスの映像だと思うのです。
本間さんいわく、僕のダンスは、からだだけでなく、あるいはからだよりも、まわりの人や環境と関わって、まわりがダンスしはじめるように見えるところが、面白いそうです。(28/05/2010)

昨日の昼は雨まじり後晴れ、園部の山で虹を3本見た。夜はぴりっと冷えた賀茂川の橋の上で、観光バスのにおいを嗅いだ。なんだか懐かしい。今朝は快晴、田んぼの焚き火の煙がたなびいてる中を登校。久々に煙で涙が出た、鼻水も出てくる。さあ、いってらっしゃい。セーターに焚き火の匂いが残ってる。(09/12/2010)

クレーターに朝靄。籾殻の山に日が射して谷と尾根を作ってる。彼岸花の打ち上げ花火、枯れ枝に浮かぶクモノス、逆さに打ち上げられたオクラ。赤米の稲穂は水分が抜け逆立っている。香ばしさと酸っぱさを含んだ臭いに交じって、煙が走っていく。泉の手前で、煙よりずっと遅い靄は晴れ渡った空と交わっている。(28/09/2011)

2010年7月「ケムに舞う」

四隅に菊が描かれた箱のヨクキクという文字の下にあるミシン目を、ポツポツと切り取っていく。
カネ製の菱形の中にくりぬかれたVサインを、指でクイッと折り曲げる。
元はひとつだったような陰と陽の重なりあった緑の螺旋を、ギシギシいわせながらはがしていく。
マッチが灯した炎が消えると溶鉱炉から出てきた鋼のようなエッジから白い幕が立ち上がっていく。

豊中の実家の前のクスノキが衣替え中。新緑が水銀灯に光ってる。今日は、バティッ

ク（ジャワ更紗）の半袖シャツで出かけた。腕が火照っているが、夜になって吹く風がさましてくれる。地面に落ちたクスノキの乾いた葉っぱがカサカサいっている。（05/05/2010）

箕面駅から滝道を上がっていくと、風がザアザアと葉っぱを揺らした。葉っぱの裏が白く光った。遠くの家もマンションもビルも白い。夏の白い光線。家へ戻ってくると、洗濯物が完璧に乾いている。両手いっぱいに抱えて、2階へ上がった。（02/06/2010）

2010年10月「風たちぬ今は秋」

秋です。
少し隙間の空いたシャツと背中の間を風がすり抜けて行く季節です。

風は、
海に吹けば波を起こし、
森に吹けば葉を落とします。

風は、
天高く浮かぶ雲を掃き、
仮面ライダーのマフラーをなびかせ、
側溝の端にたまった枯れ葉を舞い上がらせ、
淡い色をした花をたくさんつけたコスモスの茎を揺らします。

風に揺らぐ綿毛のようにも舞いたいし、
綿毛を揺らす風のようにも踊ってみたい。

秋です。
風を感じて、風になって、踊ってみませんか。

風に揺らぐものをご持参ください。

1階の木の引き戸を開けると、桜の花びらが次から次へと舞い込んでくる。見上げると、桜のてっぺんから、ふわ〜、はら〜と波状攻撃。その奥には、めくれかえったモクレンの赤、下にはユキヤナギの白、その下にはたんぽぽの黄色。モンシロチョウにモンキチョウ。なんだかめまいがする。クラクラクラ。（19/04/2010）

閃光が、打ち上げ花火の軌道のように、ニンニクの芽のような茎先に瞬いている曼珠沙華の花。身震いするような風が、稲穂を、栗の葉を、竹林をざわめかしている。柔らかくなってきた緑の間に散らした赤が、花火と比べると永遠のようでもあり、また一瞬のようでもある。明日は、運動会。（24/09/2010）

2011年3月「風にそっと舞うよ」

春ですね。ちょっと気取ってみませんか。

窓の格子の向こうに、ボタン雪が舞っている。柔らかな光に流されて。
いっぱいにつぼみをつけた桜の木が、薄紅色に光っている。雲の向こうから差す夕日に照らされて。
日が陰ると、照明が変わり、青くて白い世界に変わった。
今は、日が沈み、澄み切った空に夕焼けが。落ち葉の影に残った雪が夢の跡のよう。

今度お会いする頃は、桜の見頃かもしれませんね。
坂道を上がってたどり着いた丘の上のキャンパスで、夜桜を一緒に愛でませんか。
ジャワには、プスポ、スカル、サリ、クンバン、ムカルなど花をさす言葉がたくさんあります。曲や舞踊にも、花がつくものがたくさんあります。

物言わぬ花は、何を思い咲くのだろうか。蕾は力を内に秘め、雄しべは危ういバランスを保って揺れ、雌しべは密かにたたずむ。花は、ゆっくり朽ちていくのか、潔く散るのか。
物言わぬ踊り手は、何を思い舞うのだろうか。言わぬが花か。ただ、ガムランの風に乗って、からだをなびかせればいいのだが、それが実に難しい。
花のようにではなく、花になって舞いたい。

今朝、たなびくような濃い谷の靄に日が射すと、一斉に無数の粒子が舞い上がった。今は、飛び散った粒子がそこここに集まりはじめ、月の光を帯びている。音も無く、風もなく、ゆっくりと光を透かした雲だけが通り過ぎていく。粒子たちは光をたずさえたまま、月の入りとともにまた谷へと沈むんだろうか。(12/11/2011)

2011年5月「からだトーク　アースウィンド&ウォーター」

これまで「からだトーク」では、湯気、水、煙、風、影、花といった自然や環境とコミュケーションすることからダンスに接近してきました。今回は、これまでの映像を振り返りながら、ダンスの新しいかたちやからだのこと、このプロジェクトで目指すことなどをゆっくりとお話ししたいと思っています。

ジャワ舞踊のレッスンより帰宅。空高く月が煌煌と。向いの森からは、時折、ムオオン、ムオオン、ムオンンと聞こえる。フクロウなのか？目がランランとしているのか？（30/03/2010）

森から、またまた時折、ボオオン　ボオオン　ボオオンと聞こえてきます。フクロウかな。今までに2度姿を見ました。桜は3、4分咲き。(09/04/2010)

2011年7月「鏡の中の人」

タイトルにひかれてかダンス好きの人がたくさん集まってくれました。会場は、阪大の中庭に面した部屋だったのですが、中庭で学生たちがダンスやジャグリングの練習をしています。集まってだべっているグループもいます。
僕は、ダンスのワークショップで音楽を使うことはあまりありませんでした。特に録音されたものは。でも、去年からたんぽぽの家の定期ワークショップで、「ダンス音楽はほんとに踊りたくなるか？」というテーマで、パヒュームやマッチから、ジャズ、ジョン・ケージ、邦楽、ガムランなど、いろんな曲でやってみました。意外というか当然というか、ジョン・ケージにダンス心を刺激されました。MJは別格で、曲自体がダンスしているので、もはや何をやってもダンスになる、という感じでした。

しかし、録音でダンスするのは悲しい面もあります。ダンスに反応してくれないから

です。そして、録音は、ささいなきっかけでストップされたり、早回しされたりします。生身の人間がやっているのとは異なります。でも、録音だからこそ、今は亡きMJやジョン・ケージの音楽でダンスできたりもする訳です。（25/02/2012）

伸びやかな声、渓流を下り降りるようなリズムにノッてダンスしているはずだった。けど、MJは向こうにいて僕らは鏡の中にいた。はかない、ゆるやかな、絶対的な関係。鏡の向こうの世界の学生たちは物珍しそうに、踊り狂うおとなを見ている。ミラーから音楽がダンスで、ダンスが音楽である世界へ。（19/02/2012）

箕面の山道を登っていくと、下弦の月が街を照らすランプのようにぶら下がっている。街が照らしているようでもある。月は浮かんでる。いつもそう見える訳ではない。パラシュートが開いた瞬間、ダイバーは天高く舞い上がっていくように見える、まだ落ち続けるカメラマンから。さて、どうやって飛ぶか？（15/03/2012）

ミミズが口？を動かしながら、口よりやや下が動きの起点になって前進していく。後ろ半分は、前が伸びきった後に勝手についてくる感じ。縮んだ瞬間に、血管が浮き上がる。（13/06/2011）

長く伸びた血管が、縮んできれいな波線を描く。石の影と間違えたか、靴の下に潜り込んで来た。しっぽがのぞいているが、じっとしている。そっと足を上げると、ゆっくりと、また進み始めた。なにをよりどころに動くか、どこから動きはじめるのか。ミミズのダンス。ミミズとダンス。（13/06/2011）

タニシは水の向こうでゆっくりと滑らかに横移動。カタツムリ、ナメクジは、時間を食べているのか。ヘビとミミズは少し違う。ミミズはからだの後ろがついてくるように、ヘビはからだ中が蠕動する。意思と関係しているようにも、また頭で全然別の作戦を練っているようにも。ゆっくりなめらかダンス。（22/06/2011）

2011年10月「ムーンウォーク」

マイケル・ジャクソンの月面歩行は、どうしてこんなに人を引きつけるのか。
宝塚歌劇には、どうして大階段があるのか。

能役者は、どうしてすり足で歩くのか。
盆踊りやフォークダンスは、どうしてぐるぐる歩いて回り続けるのか。
ジャワ舞踊家は、どうしてあんなに大変な歩き方をするのか。

ダンサーは、どこへ向かっているのでしょうか。あるいは、立ち去っているのでしょうか。

10月は、月・ムーンウォークをテーマにしました。前半は、室内でいろいろ歩き、後半は、屋外へ出て行きました。
キャンパスにある池の端のデッキで、WSの間だけ出ていた月に手をかざしました。ほんのりと暖かさを感じました。その暖かさをたずさえて、池のまわりをぐるりと巡る即興散歩に出かけました。

いつもそうですが、何も決めないし、何も説明しません。何かが起こるかもしれないし、何も起こらないかもしれません。
この日は、月の力で少し不思議な散歩になりました。でも参加者の方は、どんどん歩いていってしまっていたので、あまり気づいていなかったかもしれません。(11/11/2011)

生駒山の頂上が夜の雲に照らされている。暗がり峠のつづれ織りの光が空へ上っていく。今日だったら、自転車に乗って飛べそうだ。(02/12/2011)

2012年1月「禁じられたダンス」

僕はこどもの頃から、火遊びが好きでした。マッチを灯し、じっと見つめる。また擦って、消えるまで見つめる。何本もの黒い亡骸が並んでいきます。冬には、空き地で焚き火をしました。煙にむせながら、苦労して火を大きくします。顔をヒリヒリさせながら、熱くなった服やズボンが皮膚に触れないように気をつけながら、いつまでも黙って焼き芋を待ちながら火を囲みました。大きくなった火が、空き地を、家を、学校を、街を、覆っていくかもしれないと夢想しながら、恐怖と興奮を膨らませながら。

雨上がり、かすんでいる。虫の音、揺れる葉音、アスファルトに響くタイヤの音、空高いプロペラ機。甘い香りが漂って来る、トーストの匂い？刈り取られた稲から伸びる青葉、燃えた籾殻の炭。ここだけが黒い、どこまでも黒い。ふと聞こえてくる自分の足音。響きすぎないように、そおっと歩いてみる。（15/10/2010）

鴻応山に垂れ下がる雲は、沈殿せずに上への引力を感じている。谷間に、木々の間に、電線の交わりに、鳥の鳴き声が滞空している。声が漂って、尾を引いて、そこにあり続ける。風に流されるのか、時間に流されるのか。音の存在。存在の音。（17/06/2011）

3. 見えない音を聴き、聴こえない音を見る／玉地雅浩

数えきれないくらいある〈からだトーク〉ならではの体験、その中から今回は、学外で行われた番外編（2010年12月1日、祥の郷）での、足で床を叩いて美しい音をかなでる、ただそれだけの体験から述べ始めてみたい。

よく知られた「隻手の音声」。両手を打てば音がする。では片手の音は。片手（「隻手」）の音を聴く（白隠『藪柑子』）。この禅の公案ではないが、片足だけでは足音は出ない。床と触れないと音は出ない。でも触れたままだと音が鳴らない。触れたら離れる。ただそれだけの動き。気にしなければ誰でも生み出している音、歩いている時に自然と鳴っている音、イライラと焦っている時にトントンと地面を鳴らす音、お母さんに甘えられず靴の先を地面にクリクリと捻る時に生まれる音、他にも・・・。だが、その音にこだわり出すと途端に音を生み出す事が難しくなる。

色々な歩き方を試している時、ふいに佐久間さんが足でフロアーを鳴らし始めた。トントン、ペチッ、ドン、コンコン、ガンガン、ボンボン、ゴツゴツ、ザッ、ズッズッ、つんつん、色んな音が生まれる。最初は佐久間さんの様子を眺めていたが、そのうち自分でもやりたくなり始めて音を探してみる。試しながら佐久間さんの動きを観ていると聞こえないはずの「つんつん」という音が聞こえる。よし自分も、悲しいかな自分の足の下から「つんつん」は聞こえてこない。悔しくて何度も挑戦する。だが、そんなに簡単に出会える音ではない。普段足なんかで音を奏でる事は無い。そんな言い訳が頭をかすめ出す時、片手ならぬ片足が何も触れていない時に音はしないのか、不意にそう思ったのは先の公案を思い出していたのかもしれない。

慣れない身体を動かしながら一生懸命に音を出す。試行錯誤する。速く床を叩くとこんな音、足を硬くして床を叩くと違った音、そのうち足を柔らかくして早く叩く、次に硬くして

ゆっくり叩く、予想とは違う音が出る。再現性がないのがまたいい。早く動かしているのに柔らかくて小さい音、ゆっくり動かしているのに大きな音、物が落ちるのとは違う音が出るのがさらにいい。

今度はハンマーのように重たい足になったつもりで床を叩いてみる。足を下ろすスピードを変えて試してみても、どれも重く響く音がする。足を下ろす速さは関係ないみたい。いやいやそんなはずはないとさらに試していく。このこだわりがからだトークの魅力の一つである。足が何かに接して、あるいは触れて音がする。ことさら意識しなくてもいつのまにか発生する音にこだわらなければ、これらの音は単純な事態である。人が動けば音がする。そして消えていく音。その音にこだわり出した途端、事態は複雑になる。上手な音、楽しい音、美しい音を出したくなる。

下ろす足を注意し気負いが生じ、欲が生じる。そうすると期待している音が出なくなる。予想が外れてしまうとむきになってしまい、注意を向けられるところだけ、自覚できるところだけで何とか音を出そうとしてしまう。悪循環に気づき今度は、何も意識せずに無心に鳴らしてみようと試みてみる。ところがこれも上手くいかない。気づいてしまった後に、いかに無心に音を奏でるか。からだトークはそれを問いかける場だと思う。単に「工夫」を探るのではない。単に「意識せず無心」に鳴らす事を探るのでもない。工夫と無心が一瞬出会って、生まれる音。その一瞬に出会える場所を身体に問いかけながら皆で一緒に探しているのである。

参加者が音を出す。みんなそれぞれ好きな音、こだわりの音を出そうとする。隣の人と一緒に奏でたり、場所を移動して音を出してみる。そのうち佐久間さんが上から音をかぶせてくる、押しのけてくる。その音を押し返そうとすると、不意にこんな音でどうですかと問いかけられているような気がする。佐久間さんはみんなを相手しているはずなのに、なぜかひとりひとりに問いかけてくれているような気がする。

そのうちみんなこんな事を思っているのか、分かってこんな音を出しているのだと、なんだかみんなの意図や狙いが分かったような気がしてくる。そうすると、ここで頭の片隅にこの分かったとはどういう事なのだろうという考えが浮かんでくる。いかんいかん頭で考えていると思いあわてて振り払おうとする。ところがその時に生まれた音にどこかで誰かが答えてくれたような気がする。気がつくとあちらでも、向こうでも一緒に奏でているような音がする。二人で音を楽しんだり、それ以上の人数で掛け合っている。

それらの音が佐久間さんに合わせたり、わざと離れたり、でもそのうち皆佐久間さんにまかせちゃえとなってしまう。お互い合図したわけでも、気持ちを確認した訳でも無い。ただ、そんな気がしてくるのである。佐久間さんの奏でる音に参加したり、時に邪魔しないようにと参加する。その間、時々だがほんの一瞬、それまでの自分が体験したことの無い感覚に出会う時がある。そしてその時に奏でられる音、その動きは意図しては生まれないもので

あるが、工夫し追い求めなければ生まれない感覚や動きでもある。そしてその音が生まれた時のお互いの動きの緊張や優雅さ、一方でぎこちない感じが生まれる瞬間を観ると同時に、それが参加者に伝わる場にいられる。

追い求めた音に本来、優劣はつけられない。それでも参加者は求め続け工夫し続けてゆく。そのなかに「求めない」がやってくる。求めた音、その時の動きはそのつど生じるのであって、そのままそこに留まることはできない。留まろうと願ったとたん、違うものになる。上手くいったと思ったその音を保存しようとした途端、無心から滑り落ちてしまう。だから工夫する。それを皆一緒に試してみる。そのときのからだをみんなで共有する事ができる。〈からだトーク〉はそんな場だと今は考えている。

4. 「ダンスパフォーマンス『うまれる』」と語らう／西村ユミ

〈からだ〉は、世界と語らい、世界を映し出す。世界に応じ、世界となる。しかし、その声は聴き取りにくい。世界との語らいを遮られてしまっていることもある。〈からだトーク〉は、その遮られた状態へとちょっかいを出していく。そして、からだとともに、からだ同士で、対話をする。そこにダンスがうまれる。

ダンスがうまれる。ダンスを踊るのではなく、うまれるであるのはなぜか。まさにそれを問うている映像（DVD）が手元にあった。ジャワ舞踊家であり、〈からだトーク〉の共同企画者でもある佐久間新さんに頂いたのだ。しばらく、からだと対話をしていなかった。だからこそ、それを欲していたのかもしれない。

ちょうどその頃、共同企画者である本間直樹さんから、〈からだトーク〉の再開のお誘いが届いた。その誘いに背を押されて、「ダンスパフォーマンス『うまれる』」の世界に浸ってみた。

＊＊＊

真っ白なホールに響く音。その音が悲鳴に変わったとき、中央の“白”がもがき、硬直する。別の次元では、もう一つの“白”が静かに現われる。漂いながら歩む白は、硬直する白の方へと一歩ずつ、近寄って行く。白が揺れ、音が揺れ、白を覆う白いベールも揺れる。その奥から、静かに現われた顔。その顔が硬直した白の傍らに沈み込んだのを機に、二つの白は一つの揺れとなった。揺れの中から時折現われ出るのは、動きのななめ先を、目を見開いて凝視するもう一つの顔。その顔を支えるのは車椅子だ。よく見ると、一方の白がこれを押している。あっ、そっと車椅子を押す手がそれを放した。

滑らかな音は、車椅子を放した白の動きとともに、不思議なリズムへと変わる。リズムが白を動かしているのか白がリズムを作り出しているのか、区別がつかない。でも、その音も動きも、互いを必要としている。一方が欠けると、その場が成り立たなくなるような気がする。

そのとき、一つの揺れだった白のリズムが変わる。そこに滑らかな音が重なっていく。車椅子も巻き込んだタンゴだ。男性のように振る舞う白は、車椅子ごともう一方の白を抱きかかえて揺れる。音も車椅子も白も、全てが絡まってタンゴがうまれる。そこから笑顔が押し出されてきた。

晴美さんだ。晴美さんが笑っている。二つの白の一方、車椅子に乗っているのは晴美さん。足が車椅子を必要とする状態のようだ。右手もほとんど動いていない。もう一方の白は、ジャワ舞踊家の佐久間さん。佐久間さんの文章に、晴美さんが自然にうなずいていたことが記されていた。もしかしたら、晴美さんは幾つかの障碍をもっているのかもしれない。しかし白になっている晴美さんには、それは関係ないことのようだ。何よりも佐久間さんがこう記している。

> 2004年、奥谷晴美さんとはじめて出会った時、
> 「ああ、これは参った！」
> と思った。こんな風に舞台に立てないと。
> こんなに力強く、こんなにさりげなく、こんなに自然に、こんなに情熱的に、こんなに切実に。（佐久間［2004］

佐久間さんは、ジャワ舞踊においては、「ただ、立つ」ということが難しいと言う。「ただ、そこにいるだけなのに、存在感を持って、充実感を持って、でもさりげなく、自然に、そこに、ただ、ある、だけ。」奥谷晴美さんは、さりげなく、自然に、そこに、ただ、ある。その存在感に圧倒された。「なにがそうさせるのかを探ろうと、一緒に動いてみた」という佐久間さん。そこからこのパフォーマンスがうまれたのだ。

パフォーマンスは、次第に高揚していく。「はーァ」「ほーォ」「はーァ」「ほーォ」。この佐久間さんの声の響きの中で、晴美さんの笑顔がこぼれる。佐久間さんにも、時折微笑みがみられる。これから起こることを予感させるような表情だ。

中央に戻った二つの白は、一方をそこに留め、他方はその正面から挑むようにちょっかいを出し始める。晴美さんの正面で、佐久間さんの両腕は空（くう）を掴み、その一方が晴美さん目がけて踊り出る。晴美さんの左手はそれに追随していく。風のそよぎに揺れる木の枝のような佐久間さんの腕、その動きに晴美さんの左腕が誘われる。その左腕が風になびく。

ところがある瞬間から、そう、佐久間さんが晴美さんから離れて大きく動き始めた瞬間から、晴美さんの右手が、佐久間さんを糸で操っているように動き始めた。そう見えてしまうのだ。けっして大きな動きではないが、晴美さんの右手のちょっとした動きが、遠くにいる佐久間さんのからだを大きく「ぐるぐる」かきまわす。佐久間さんの動きが晴美さんの動きを促していたはずなのに、気づいたら反転していた。いつ、変わったのだろう。このときの晴美さんは指揮者のようだった。佐久間さんは、弾んだり転がったり、これまでにない大きな動きでこの場をかきまわす。それにサックスの音も絡んで行く。

遊んでいるようにも見える。佐久間さんが「晴美さん」「はーるみさん」「はるー」と呼ぶ。遠くから呼びかけていたかと思うと、ぐっと近くに寄ってきて、「はるみさん」。右手を上げると晴美さんの左手もやって来て一緒にパチリ。3回目は、佐久間さんがわざと手を引っ込める。絶妙な駆け引きだ。晴美さんもちょっとだけ不機嫌そうな表情で攻防する。不意に沈み込んだ佐久間さんが、その晴美さんの顔に並び、二人の顔がおどけて踊り出す。

「さあ、晴美さん、行こう」。そう聞こえてしまいそうな佐久間さんの誘いは、晴美さんの右手を自分の首の後ろへと誘い、晴美さんのからだをそのままふわりと宙に浮かせる。佐久間さんが晴美さんを抱えたまま緩やかに踊り出したのだ。そのリズムは、佐久間さんの首の後ろに回った晴美さんの左手を右手に掴ませ、まるで晴美さんも軽やかなステップを踏んで踊っているように見せる。リズムの中でリズムとしてあるときは、揺らぎの中で揺らぎとしてあるときは、その極である個々の能力は問題にならない。一つのダンスとなっているからだ。ダンスのうまれいずる状態に立ち会うこと、うみ出すことに絡んで行くことが、この時間のすべてなのだから。

最後は、晴美さんによるはがい締め。仰向けになって押さえつけられている佐久間さんが、何度も起き上がろうとする。その振る舞いが滑稽だ。思わず観客も噴出してしまう。こうして、二つの白と音の絡み合いのなかから一つのダンスがうまれ、また解けて終わりを告げた。

そう、ダンスはうまれるのだ。促し合いと駆け引きの中で、分けることのできない音と色と動きとともに生起する。ダンスの中から、佐久間さんと晴美さん、音を生み出したゴードンさんが分節化される。最後に、深くお辞儀をするのは、その証拠だろう。

＊＊＊

ダンスは、それを見る者をも巻き込む。言い換えると、ダンス自体が見る者の視線への応答としても成り立っている。だから、次のダンスでは、それがうまれるのに直に立ち会おう、一緒に作り出そう、ダンスのなかから。それが〈からだトーク〉だ。

注

1. DVD　ダンスパフォーマンス「生まれる」(2011年8月6日（土）芦屋市立美術博物館エントランスホール)、出演　佐久間新（舞踊家)・奥谷晴美（たんぽぽの家アートセンターHANAパフォーマー)、音楽　ジェリー・ゴードン（即興音楽家)、衣装　堀井拓也（デザイナー)、制作　財団法人たんぽぽの家。

引用文献

佐久間新 (2011)「あたらしいダンスに向かって」『DVD ダンスパフォーマンス「うまれる」』財団法人たんぽぽの家.